

●平成 30 年度一般前期試験(英語)講評

ねらい

前期試験では、大学で求められる基本的な学力を試すことを念頭に、センター試験とは異なる視点で総合的な英語力を問う。具体的には、長文の内容を素早く読み取り、その要点を日本語・英語で簡潔に表現する力や、未知の語彙について文脈中で説明されている箇所を的確に理解する力(或いは、語彙の説明がなされている箇所を的確に理解する力)、自分の考えを英語で論理的に表現する力を試すことをねらいとしている。

全体講評【1】【2】

「ねらい」にある「要点を日本語・英語で簡潔に表現する力や、未知の語彙について文脈中で説明されている箇所を的確に理解する力」を試す問題である。記述式問題の解答においては、解答に書かれている日本語の意味がよく理解できないもの(日本語の主語と述語の繋がりが不明瞭な解答や、日本語で解答をしてはいるが、問題文の英文を直訳しているような解答)が散見された。日本語で解答を行う時は、答案に書いた自分の日本語を再度読み直して、主語と述語のつながりがおかしくないか、修飾語の位置がおかしくないか等の確認をしっかりと行うことが必要だ。

英文の問いに関しては、**解答する前に日本語の指示文をしっかりと読むことを心掛けるべきである。**また、**解答する際には、参考にすべき箇所が本文中にあるが、それを探す手がかりとなるキーワードは英文の問いにある。**英文の問いをしっかりと読んで解答を行う練習が足りていない受験生が多くみられた。英文の問いに対してどのように対処すべきか日常的に練習することが必要である。

各設問について

【1】

問1

英文和訳をする際は、問われている英文の語句や構文を理解していることが採点者に伝わるように訳すことが肝要である。意味が分かる英単語を拾い読みして、それを勝手につなげて和訳文を創作しても、採点者には英語を理解していないことしか伝わらない。

(ア)

全体的に良くできていた。be useful for doing は「～するのに役に立つ」という意味である。また、give directions to は「～に方向を与える」から「～に道順を教える、～に道案内をする」と訳すこと。

(イ)

①true, but の訳し方、②who と in which の関係代名詞節の訳し方が問われる英文である。関係詞節を訳す問題は入試では必ず出るので、準備を怠らないこと。また、students を訳していない答案、jobs を「企業」や「会社」と訳した間違いなど、基本的な語彙力が不足していると感じられる答案も散見された。

(ウ)

意外と差が出た問題である。文頭の with に注意が必要で、同時の「～につれて」、または、原因の「～のために」と訳すと良い。また、economic growth in Asia は「アジアにおける経済成長」であるが、これを「経済が成長しているアジア」と訳すなどの間違いは、英語を理解していないと告白しているようなものである。from A to B, south, around など、中学で習っているはずなのに、和訳に反映していない答案も見受けられた。基本語彙をしっかりと身につけた上で、大学受験に備えて頂きたい。

問2

特に問題なし。

問3

誤答の多い問題だった。ただ文章を抜き出しているだけのものや、指示文を読み違えて質問の答えになっていない解答などが散見された。本文だけでなく、指示文もしっかり読み込むこと。

問4

正答率 60～70%程度 中々の正答率だが、もう少し正答率が上がってもよい問題であった。正答はいくつか考えられるが、中心的な論拠から少し外れたものを選んでいるものもあった。抜き出しているが抜き出し方が間違っているものがあった。例えば、Another reason for studying English is that it might be useful in a future job. から Studying English is that it might be useful in a future job.と抜き出しているものがあった。読解と文法理解に問題があると言える。また、ほとんどパラフレーズする必要がなく抜き出して答えればよいものであったが、必要以上にパラフレーズを行い英語表現が間違っただけのものも多かった。

問5

正答率 30～40%程度 argument against studying English at university にあたるものを書き出す問題である。問4に比べ多少パラフレーズが必要な問題であったが、本文からの抜き出しでも正答できる箇所があったが、うまく見つけられていなかった。もう少し緻密な読解力が必要であろう。

問6

正答率 60%程度 中程度の正答率だったが、もう少し正答してくれることを望んだ。Who と聞かれていることがわかっていない受験生が不正解である傾向にあった。例えば、the top levels of business and government とすべきところを /n the top levels

of business and government など、表現的な間違いが目立つ。

問7

この問題は非常に誤答が多かった。ただ一文を丸ごと抜き出すだけでは答えにならないので、きちんと問いの内容に対応する形で答える必要がある。また、本文中の正解に該当する部分が節ではないために、SV を伴わない不完全文で答えているものも多かった。

問8

正答率 80%程度 よくできていた。問題の趣旨が理解できていない誤答も見受けられた。

【2】

問1

(ア)

全体的に問題はなかったが、少数の受験生が 'a quarter of' (四分の一) が理解できていなかった。また、'as a matter of fact' (事実) の訳を「事実の問題」としていた受験生が三分の一程度いた。

(イ)

下線部の 'have little to do' が理解できていないために、半数以上の受験生が誤答であった。また、受験生の三分の一程度が「大学で英語を勉強する理由がない」と訳していたが、常識で考えても誤答であることは明らかである。

(ウ)

半数以上の受験生には問題なかったが、'in a way' (ある意味では) を「一つの方法」、'self-understanding' (自己理解) を「自分で理解すること」と誤訳している受験生もいた。

問2

全体的に得点率が高かったが、しいて言えば1, 2の正解率が低かったように思う。本文の内容に関する正誤問題なので、先入観にとらわれないように気をつけること。

問3

正答率は高く、特に問題なかったが、時折文で答えている答案があり、それが文法的に間違っているため減点したものもあった(Waiters do.のような解答)。問題文をよく読んで、指示には忠実に従うこと。

問4

問題文の “to connect with the rest of the world” が本文中(①段落5行目)の “to integrate itself with the rest of the world” とほぼ同じ意味であることが理解できれば、そのあとに続く “to help students in other countries to learn Japanese” を答えとして導くことができる。”to help students in other countries” のみでは「何を手助けするのか」

分からないので解答として不十分。

問5

正答率高く、特に問題なし。

問6

問題文の“be good at”が本文中(⑥段落10行目)の“become experts in”とほぼ同じ意味であることが理解できれば、そのあとに続く“written English”が解答の鍵であることが分かる。ただしこれを読み間違えて“Japanese high school students are good at *writing* English.”とした回答が非常に多かった。前後を注意して読むと“Their relationship with the language is almost completely passive and receptive”とあり、日本の高校生が外国語を学ぶときは「受信」スキル(読む・聞く)を中心とした受動的なものになりがちだと指摘されている。更に同じ行で“spoken English remains unfamiliar”とあり「発信」スキルである話す力を伸ばす機会が不十分であることも書かれている。従って同じく「発信」スキルである書く力だけが優れているとは考えにくい。正確には“Students memorize rules and vocabulary, and translate sentences”(同段落6-7行目)のような活動を通じて、高校生は「書かれたテキスト(文字情報) = written English」を理解することは得意である、と読み取るべきである。

問7

問われているのは「大学の英語教育は高校とどのように異なるべきか」なので、ただ単に“They should be different.”と解答したのでは不十分。高校との差異あるいは比較が明確に書かれているのは“If university English courses give students a chance to discover the pleasure of being able to communicate in a foreign language, students who were turned off by high school English might discover that they like English after all.”(⑥段落13行目から)もしくは“[Universities should not teach] English for tests, but [they should teach] English for life.”(⑦段落4-5行目)である。従って解答としては「大学では外国語でコミュニケーションできる喜びを見いだせるような英語教育を行うべき」あるいは「大学での英語教育はテストのためではなく、実生活で使えるためのものであるべき」などの解答が考えられる。

全体講評【3】

大学入学後に必要となる英文構成法に基づいて、論拠・理由を示しながら自分の考えを論理的に英語で表現できるかを試した。

今年度は、語数を 200 語以上とした。しかし、例年出題している形式の問題であるので、対策はし易いはずである。昨年と同じように、(1)導入(introduction)、3つの段落から成る主文(body)、と結論(conclusion)から成る短いエッセイを書くこと、(2)問題 I, II の英文内容を基にして書くこと、を要求した問題となっている。多くの受験生がエッセイを書くための英語の指示文を読んでおらず、主文が1～2段落から成るものが散見された。常に日本語・英語の指示文をしっかりと読み、問題を解く習慣をつけることが肝要である。

対策法としては、(1)日頃から日本語や英語の文章を読むこと、(2)読んだ内容に対して(批判的に)考えること、(3)読んで感じたこと・考えたことを書くこと、を習慣化することがある。これによって読解力や分析力が深まり、入試対策のみならず、深みのある学力や教養を養うことが期待される。

高校の英作文の教科書は非常に良くできているので、英文を書く際の参考にして、英語の文章構成を理解し、それに則って何度も小論文を書く練習をするとよい。また、以下の「答案作成についての講評」で指摘されている点にも十分に留意して小論文を書く練習をすることを勧める。

答案作成についての講評

Comments about the Entrance exam essay question

The general standard of comprehensible English composition was high. There were very few essays with grammar or vocabulary issues that made them difficult to read. Most of the essays made an effort to include an introduction, two or three paragraphs, and a conclusion. A few areas that could be improved are: a response to the nuance of the question. The nuance in the question was ALL or just SOME. Very few writers noticed or responded to this issue. Secondly, **there was a lack of real critical thinking skills that showed a depth of thought or understanding of the texts.** Because of this, few students were able to give original or non-standard answers to the question. The majority of writers argued for English to help tourists, and English for job hunting, but were unable to critically discuss any other issues. This meant writers were struggling for a third idea to complete their essays.

A sample essay

The articles question whether it is necessary for ALL students to continue their English studies at university in Japan. I have three reasons why I believe this is not necessary.

Firstly, we could argue that English is necessary for work. However, as the writer points out, there are few opportunities in Japan for jobs that require English. I am from Beppu. We have many customers from neighboring China, Korea, and other Asian countries. I would therefore suggest that specializing in other foreign languages may be just as useful for some students when it comes to job hunting.

Additionally, the article suggests that English is useful for traveling. However, we cannot be sure that local people in our destination speak English. We may derive as much pleasure from speaking a small amount of the local language, rather than hoping that everyone knows some English. Recently I went to Thailand and I think the taxi drivers and shop keepers really appreciated it when I tried communicate with them in Thai.

Finally, in my opinion there is a problem of motivation. Not ALL students love English. Having demotivated students in my English class spoils my English practice. I would much rather take an English class with only a few English Majors, rather than lots of non-motivated classmates.

In conclusion, to serve the job market, to further relations with hosts when traveling, and to improve motivation in classes not ALL students need study English.

240 words